春秋回顧録

吉村正一郎

朝日新聞社

待秋日記

第一刷　昭和五十三年十一月二十日

定　価　一五〇〇円

著　者　吉村正一郎

発行者　朝日新聞社　藤田雄三

発行所　朝日新聞社　千代田区有楽町二ノ六
〇三(二二二)〇一三一

印刷所　図書印刷株式会社

© 1978 Teru Yoshimura

0095-254616-0042

目

次

待秋日記

七月　七
八月　二
九月　七
十月　三
十一月　一五

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

雨眠堂雑記

上田秋成の晩年　一八三
西鶴と茶道　一八九
志賀直哉の回想　一九二
印象とネクタイ　一九八
淡交記　二〇二
米とサケ　二〇七
遠雷　二一〇
走馬看花——中国二週間の旅　二一九
あとがき　吉村公三郎　二六七

装幀　熊谷博人

待秋日記

七

月

七月三十日（土）

唐招提寺長老に風致審議会の委員諸氏と共に蓮飯の昼食会に招かれ、楽しみにしていたが、からだの調子がわるいので出席を断る。

午後内田君[一]マッサージに来てくれる。

四時過ぎ女子大扇田[二]教授、唐招提寺の帰途来訪。台所、風呂場等のやり替えについて教示を受けたいので一度来てほしいと頼んでいたのだ。寺から茉莉花の枝もらって来て二本くれる。さっそく鹿沼土に挿木する。

七月三十一日（日）

ガラクタ[三]会に、岩坂[四]君車で迎えに来てくれる。行くつもりだったが、やはりやめることにする。よく熟れた小粒のトマトを貰う。食欲はほとんどないが、こんなものなら食べられそう。夕方、五つ六つ口にしたが旨かった。

午後、照子[五]、ぼくの病気についてはじめて真実を打ち明ける。

昨年八月十七日天理よろず相談所病院に入院、一週間の精密検査、点滴注入の後、二十三日、幽門狭窄の手術を受け、胃を三分の二切除したが、それは胃癌であった。幽門部にガンが出来、それも胃壁の外側にまで及んでいた。病状は初期の段階を過ぎ、末期ではないがその中間の二期的なところまで進んでいた。肝臓に転移は見られなかったが、リンパ腺の二た節目まで拡がっていたので、四節目で切除した（この辺りのことぼくにはよく解らず）。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

しかし病気の進行は予想よりも早かった。腹膜に転移していると思う。このままで行くと、今度はガンは一個所ではなく、星のようにばら撒かれているから手術は出来ない。手の施し様はない。痛みがひどくなれば医者としては痛み止めの麻薬を注射して痛みを和らげることしか出来ない。云々。

以上のことを照子は、七月二十五日月曜に天理病院に行った際、ぼくと岩坂君とが帰ったあとで、柏原貞夫博士（副院長、腹部外科部長）から大略を聞かされたのである（話の内容は、さらに八月一日月曜、照子、真美、天理病院に行き柏原氏から補足的に聞いた部分も入っている）。

ぼくは照子の話を聞いて、かくべつ驚かなかった。ショックというほどのものは受けなかった。平然としていたと言うと嘘のように聞こえようが、嘘ではない。何故平気でいられるのか。どういうことなのか。ぼく自身分らない。ガンは不治の病とされている。お前は実はガンなのだと言われて、そうか、そうだったのか、とまるで自分のことでないような気で居られるというのはどういうことなのだろう。極度に暢気なのか、鈍感なのか。無神経なのか。高僧のように生死を超えた心境にいるのだろうか。昨年手術の当時、奈良の岡谷（実）病院長のレントゲン写真を見ての説明では、幽門部に潰瘍が出来たり癒ったり、そんなことが繰返されて、その痕がケロイドになり幽門がつまったのだということであったが、ぼくは岡谷先生はそうは言うけれど、ほんとうは癌ではないのかと疑っていた。癌であって少しもふしぎでない。大いに有り得ることだ。照子の告白を聞いてかくべつショックを感じなかったのも、そうした心の準備がなにがしかあったためかも知れなかった。

照子は、明朝真美を連れ、大阪鶴橋の指圧療法の人の所に行き、翌二日の受診の予約をし、帰りに天理に行き、柏原先生からさらによく聞いて来るという。ぼくは照子の言う通りにすると約束した。

(一)内田茂。近所のマッサージ師。(二)扇田信。奈良女子大学教授。住生活学。(三)毎月一回、同好者が集まり、東大寺内で開かれる美術骨董の交換会。(四)岩坂千尋。元古書店主。(五)吉村照子。妻。(六)吉村真美。長女。

八

月

八月一日（月）

照子、真美 早朝六時頃家を出て鶴橋へ行く。帰りに天理病院に（この時に柏原先生からぼくの病気再発のことをもう一度聞いた）。

照子の話――

大阪鶴橋の〝加藤整体指圧〟というのは、指圧と〝ミルク断食〟とを併用してガンの治療をする。照子は先月二十五日にぼくの病状の絶望的なことを知り、その後、かねてから読んでいた自然食療法の本の中で、この〝加藤整体指圧〟の存在を知り、もう頼るものはこれしかないと考えた。それであらかじめ電話で今日の訪問を予約した。

ガンのことをぼくに内緒にしていた彼女が何故打明ける気になったのか。それはガンは必ず癒ると信ずるようになったからだという。もしガンが不治の病気なら、彼女はいつまでも事実をぼくに知らせなかっただろうと言った。絶対にこの療法で治ると思うから、何もかも言う気持になったと言うのだ。そう言われればその気持はぼくに解る。

近代医学はすでにさじを投げている。もう頼ることは出来ない。そこで近代医学とはまったく異る方法に飛びついたのである。彼女はどうあってもぼくの病気を癒したいと強く望んでいる。その熱意と献身的な愛をぼくは貴いと感じ、もう何も言わずに照子の言いなりになろうと心を決めたのである。

〝ミルク断食〟というのは、湯（五〇度～八〇度）約二合（三六〇cc）に乳児用粉ミルク一〇〇グラム、五健草小さじに軽く二杯、生酵母小さじ二分の一を混合攪拌したものを、一日にカップ三～六杯のむ。他の

飲食物は水以外一切禁止。

照子が材料を買い整えて来たので、さっそく造って飲む。しばらくして果して激しい下痢。説明書には、ドロドロした便や魚の腹わたの腐ったような便が沢山出るが、これは腸に溜った宿便や汚物が排泄される証拠で、激しい下痢が続いても心配ない。そのまま服用を続けてよい、とある。飲んだ結果は全くこの説明書の通りであった。

八月二日（火）

朝七時前出発、岩坂君の車で照子と鶴橋へ向う。生駒を越え、東大阪市に入ると折からのラッシュ時で路上の車停滞し、遅々として動かず、車で来るのは考えものだと思った。

二時間かかってようやく鶴橋国鉄駅に到着、加藤整体指圧というのは駅から一〇〇メートルほどの距離、小路を少し入ったところにあった。料金を払い、服をロッカーに仕舞い、二階の施療室に行く。二十畳くらいの一と間に二列に敷布団を敷きならべ、六人くらいずつ臥た人々を白衣の男女の施療者が指圧をやっている。

この会の会長加藤清氏はぼくを仰向けに臥かせ、腹にさわったりしながら、病気は絶対に治る。自分の長い間の経験でそれが分る。治らぬものならこんなことは言わない。あなたには自然治癒力があるから大丈夫だ。必ず癒ると自分でも確信しなさい。

いきなりそう言われても、ぼくには信じられない。しかし加藤氏がぼくの病気は必ず治ると信じているという事実は信じることが出来る。しかしそのことは客観的真実なのか。

しかしぼくは一切何も考えないことにしようと思う。自分を投げ出し、自分を空っぽにして、無というか空というか、我は一切棄てこれからは他人の意のままになろうと思う。照子に対してもそうだが加藤さんに対してもそうである。これはぼくのように自意識の強い人間には自己革命に等しい。どこまで出来るか、とにかくやってみよう。

正午過ぎ帰宅、午後少々ムリであったが、学園(一)に出勤、泉(二)、前島(三)、住山(四)、熊沢(五)氏ら、住友の人二人来る。かねて依頼してある学園事務職員の給与規則の改訂の問題である。結論を出すのに三、四ヵ月を要するだろうという。

本部事務局の課長級の人事にまで話は及ばなかった。ぼくの病気のこと泉さんにだけは話しておこうという気持だったが、その機会はなかった。後日にしようと思う。

八月三日（水）

近鉄で鶴橋に行く。八時前に先方に着いた。車で来るよりもはるかに速く、ラクだ。

加藤氏の治療を受け、十時半頃には帰宅出来た。今後はこのようにするのが一番いい。

ミルクしか飲まず、下痢が続いているからだでともかくも鶴橋まで行って帰れるのはわれながらふしぎな気がする。もっとフラフラになりそうなものなのに。

もっとも〝ミルク断食〟という言い方は正確でない。水ばかり飲むのならほんとの断食だが、乳児用粉乳、酵素、その他、水ではなく栄養分を含んでいる。激しく下痢してもいくぶんかの栄養分は腸に吸収されているのではなかろうか。体力がそれほど目に見えて落ちないのはそのためであろうか。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo